

序

当科の特色は、毎日読影業務終了後に行っている熱い症例検討会です。この検討会は、知識と自由な発想力だけがものをいう、年齢・経験の差なんてない、ある意味下克上の世界です。若手からの鋭い意見にヒヤヒヤすることもあります。アルコールをあまりたしなめない私にとって、検査技師や研修医も参加し、自由に発言できるこの検討会ほど楽しい時間はなく、年齢を重ねた今でもワクワクする至極の時間です。かつてディスクッションは深夜に及び、それでも結論がつかず、そんな時には皆で近くの定食屋に行き、いったん頭をクーリングした後、さらに議論を再開するという、今振り返れば懐かしくさえ思える時代もありました。さすがに今は、深夜にまで及ぶディスクッションはできず、いささか寂しい思いもないわけではありませんが、それでも濃厚な討論会は健在です。

私が市場文功先生とお会いしたのは、盟友、青木悦雄先生（現・大津市民病院副院長）と開催する勉強会でした。私が提示した難解症例に対する彼のユニークでかつ科学的根拠に基づいた豊かな発想で真実にせまる姿に、感銘を受けました。彼は大津市民病院の非常勤という立場でしたが、青木先生に無理にお願いし、毎週木曜日に当院のカンファレンスに参加してもらっています。数年前からは、今や日本を代表する画像診断医の松木充先生にも毎週木曜日に検討会に参加いただき、当院はいながらにしてコアな検討会ができる大変恵まれた環境となっています。

当科で開催しているホットな症例検討会を多くの人に分かち合いたい思いで、本書の発刊を思い立ちました。本書は3部構成となっています。1部は基礎編と実践編に分けて大津日赤ならでは印象に残る症例、2部は一筋縄ではいかない難解症例での画像診断の考え方の解説編、3部は研修医と放射線科専門医との問答形式となっています。

長年検討会をしていて感銘を受けることは、同じ症例でもエキスパートにより違う角度の視点、考え方から真実に迫り、それぞれ筋がしっかり通っていることです。本書は決して答だけを学ぶのではなく、このような画像診断の考え方、その多様さ、興味深さを学ぶことを主眼としています。

当院に来られて、ワクワクするカンファレンスを体験されるのが一番ですが、少しでも大津画像カンファレンスの一端に触れていただき、画像診断の楽しさ、奥深さ、多様さ、自由な発想を本書で感じていただければ幸いです。

最後になりましたが、大津画像カンファレンスの貴重なメンバーである有望な若手スタッフを送ってくださる京都大学大学院医学研究科放射線医学講座教授 富樫かおり先生には常日頃からご配慮いただき、心より感謝申し上げます。また今回の企画から執筆、出版に至るまで沢山の苦難の過程の中で、多大なご支援をいただいた学研メディカル秀潤社画像診断編集室の栗田由香里さん、原田顕子さんに心よりお礼申し上げます。

それでは、大津画像カンファレンスワールドによろこそ！

2016年7月

大津赤十字病院放射線科 小林久人

平成4年(1992年)に大阪医科大学放射線医学教室に入局し、在職中は榎林 勇名誉教授、鳴海善文教授の指導のもと放射線診断学の薫陶を受け、現在、近畿大学医学部放射線診断科に異動し、村上卓道教授のご指導を仰いでいます。このような経歴の私が、どうして大津赤十字病院(以下、大津日赤)に関わっているのか…。

6年ほど前に、今回一緒に執筆した旧友の市場文功先生に、京都の研究会で大津日赤の小林久人部長を紹介していただいたことに始まります。勿論、以前から大津日赤が関西トップレベルの症例数を誇る病院であること、また小林部長をはじめ放射線科が画像診断から超音波検査、IVRまで精力的に行っていることを知っており、初めて部長を紹介していただいた時の緊張と感動は今でも覚えています。その後、読影のお手伝いの誘いもあり、大津日赤にお邪魔することになりました。そこで多忙な日常勤務の後に夜遅くまでカンファレンス(いわゆる大津画像カンファレンス)が行われ、卒後数年の臨床研修医、専攻医に対し一生懸命教育し、熱のこもったディスカッションをなされる部長の姿に非常に感銘を受けました。私自身、大学病院ではカンファレンスをマネジメントする立場になりましたが、大津日赤では逆の対場で、若手スタッフに交じって部長に質問され、コメントを求められ、非常に刺激を受けながら多くのことを教えていただきました。また頼りなかった若手スタッフがカンファレンスを通し、週単位で診断、手技が上達する姿には目を見張るものがありました。

そこで私自身、この素晴らしいカンファレンスを多くの施設に紹介したく、市場先生と相談し、小林部長の還暦という節目に本書の発刊を提案しました。現在勤務している、あるいは巣立った若手スタッフにも執筆をお願いし、多くの症例を提示することができました。また少しでも部長やスタッフに還元できるよう、自分自身が経験した症例や研究会などで勉強になった他施設の症例をカンファレンス時に紹介していましたが、今回、それらの症例も他施設のご協力のもと、提示させていただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。

近畿大学医学部放射線医学講座放射線診断学部門 松木 充

私が平成8年(1996年)に奈良県立医科大学を卒業して大阪・東京の病院で修業を重ね、東京慈恵会医科大学での勤務を経て安住の地として選んだのが大津市民病院でした。平成19年(2007年)のことです。大津に来てから、滋賀県の画像検討会に出席するようになり、BMW(琵琶湖メディカルイメージングワークショップの略)という研究会で大津赤十字病院の小林久人先生と初めてお会いしました。小林先生は、あの小山貴先生を指導された先生だと伺っておりましたので大変緊張しましたが、とても好意的に接していただき、間もなく大津赤十字病院で読影アルバイトをさせていただくことになりました。

大津赤十字病院は当院の倍近い規模の大病院で、症例の豊富さは関西地区でもトップレベルです。にもかかわらず、当時の読影メンバーは小林先生以外は全て研修医という大変歪な構成でしたので、研修医達の質問欲は凄まじく、質問への対応がバイトの主な業務でした。小林先生は私のアルバイト日に合わせて1週間分の興味深い症例をカンファレンス形式でプレゼンしてくださり、私の読影力を試すことは勿論のこと、貴重な症例を数多くご提示くださり、小林先生の洞察力には何度も唖らされました。特筆すべきは小林先生のエコー技術であり、CT・MRIでは絞り切れない病態でも、エコーで確定診断に至ってしまうことがしばしばありました。このカンファレンスこそが、本書のタイトルである大津画像カンファレンスそのものであり、そこで検討された数多くの貴重な症例は小林先生の偉大な財産です。

近畿大学の松木先生が週1回のアルバイトとして大津赤十字病院に来てくださるようになってからは、研修医たちの質問への対応にさらに厚みが加わりました。松木先生から、小林先生が還暦を迎えられることに合わせて何かご恩返しができないだろうか、という発案のもと、ようやく本書が完成いたしました。執筆陣は今まで大津赤十字病院で勤務されたことのある京大医局員の先生方が中心となり、松木先生には全体的な構成から最終チェックに至るまで八面六臂のご活躍をいただきました。小林先生の薫陶を受けてきた、“オール小林”の執筆陣で本書が完成したこと、本当に嬉しく思います。本書に小生が加わったこと、法外の喜びと感じております。

大津市民病院放射線科 市場文功